

JICAボランティアによる「原爆展」

世界60カ国を超えて広がる活動

JICAボランティアの原爆展は、広島出身の青年海外協力隊4名が、派遣先のニカラグアで2004年に開催したのが始まりです。世界の平和と安定に貢献するJICAボランティアの多くが原爆展の趣旨に賛同。これまでに62カ国で127回開催されました。(2015年4月現在)



現地の人と同じ目線で試行錯誤

被爆の実相を伝えるポスターやDVDなどが広島・長崎両市から提供され、広島平和文化センターを通じて現地に送られます。

JICAボランティアが行う原爆展の内容や開催方法は、国や地域の事情に合わせてさまざま。被爆の実相とその悲惨さだけでなく、平和の大切さや復興への道のりを盛り込んでいるのが特徴です。

現地の人と同じ目線で活動するJICAボランティアが試行錯誤を重ねた原爆展だからこそ、現地の人々の心に響くのかもしれません。



日本の姿が復興の希望に

「自分たちも同じように復興できるんだ」。涙ぐみ、そう語る来場者もいます。内戦や紛争を経験した人々は被爆者の生きざまに自らを重ね、現在の広島・長崎、そして日本の姿に復興の希望を見出します。起こった出来事は違っても、絶望から立ち上がり、未来へ歩み出そうとする人々の気持ちは同じです。

原爆展開催を通じて、JICAボランティアは「被爆国が発信することの意味」に気がきます。「平和への思いを共有し、ともに歩みたい。」JICAボランティアの原爆展はこれからも引き継がれていくでしょう。



派遣国で原爆展を開催するには？



ウガンダでの原爆展

原爆展開催手順

- 派遣国のJICA事務所に相談
 - 配属先に相談
 - 広島市JICAデスクにメールで連絡
 - 申請書類送付
 - 原爆展資料発送
 - 現地にて開催
- 広島市JICAデスクに実施報告書提出



お問い合わせは

広島市JICAデスクまで

〒730-0811 広島市中区中島町1-5(広島平和文化センター内)
TEL:082-242-8879 FAX:082-242-7452
E-mail:jicadesk@pcf.city.hiroshima.jp



独立行政法人 国際協力機構
中国国際センター
URL:<http://www.jica.go.jp/chugoku/>

世界にヒロシマ・ナガサキを伝える

JICAボランティアによる 原爆展



「復興への希望を」初めての原爆展

ニカラグア 小坂法美隊員(小学校教諭)

2004年当時のニカラグアは、内戦の影響が色濃く残り、人々は未来への希望を持っていない状況にありました。私と、3人の広島県出身の青年海外協力隊員は、「広島の経験を通してニカラグアの人々に平和の大切さを伝えたい」とともに、復興への希望を持ってもらいたい。」と考へ、初めての原爆展を企画しました。開催に至る道のりは平坦ではなかったですが、強い気持ちでふれることはありませんでした。



第1回の原爆展

原爆展当日、会場には、広島平和記念資料館等から寄贈されたポスターや資料を展示し、ドキュメンタリーDVD、映画を上映しました。多くの来場者が、自分たちも過去に傷ついたことを思い出し、涙を浮かべて資料を見つめていました。多くの人が「なぜ相手の国を憎んでいないんだ」「なぜ日本も原爆を作ってやり返さないのか」といった疑問を抱き、その一方で広島が復興し平和を希求し続けている姿に感銘を受けていました。

原爆展を通して被爆の実相を伝えるだけでなく、広島の復興や平和に対する取り組みや想いを伝えることが世界に対して非常に価値あることだと感じました。



折り鶴を手に、笑顔の子どもたち(セネガル)



資料に見入る来場者(カメルーン)

原爆展を実施した国・地域 (2015年4月現在)

〈アジア地域〉	〈アフリカ地域〉	モザンビーク	ドミニカ	〈ヨーロッパ地域〉
インドネシア	ウガンダ	ルワンダ	ドミニカ共和国	ハンガリー
ウズベキスタン	エチオピア	ナミビア	ニカラグア	ポーランド
カンボジア	ガーナ	チュニジア	パナマ	ルーマニア
スリランカ	カメルーン	モロッコ	パラグアイ	〈大洋州地域〉
ネパール	ケニア	〈中南米地域〉	ペルー	サモア
バングラデシュ	ザンビア	アルゼンチン	ブラジル	トンガ
パキスタン	ジンバブエ	エクアドル	ペリズ	バヌアツ
フィリピン	セネガル	エルサルバドル	ポリビア	フィジー
ブータン	タンザニア	グアテマラ	ホンジュラス	パラオ
モンゴル	ブルキナファソ	コロンビア	メキシコ	マーシャル諸島共和国
キルギス	ベナン	コスタリカ	ベネズエラ	ミクロネシア
モルディブ	マダガスカル	セントルシア		〈中東地域〉
タイ	マラウイ	チリ		ヨルダン

内戦が続いた国で、議論を重ね実施

ウガンダ 岡本大夢(村落開発普及員)

生まれ育ったヒロシマを伝えたい一心で始めたウガンダでの原爆展。最初は自分たちが伝えたいことばかりが先行してしまいましたが、数年前まで内戦が続いたウガンダの人々が何を知らたいのか議論しながら回を重ね、最後となる4回目の原爆展は念願の自分の活動地での開催となりました。県教育担当官や中学校教諭などが主催者となり、約250人のウガンダ人と日本人で「What is PEACE for you?」を共有することができました。平和の原点は互いを理解することだと思いました。



真剣な眼差しで説明を聞く学生たち

平和 長崎からフィリピンへ

フィリピン 木村暁代(青少年活動)

配属先は、第二次世界大戦で日本軍が最後の激戦を繰り広げた地にある大学。長崎出身で、被爆3世である私は、そこで「原爆展&平和フォーラム」を開催しました。長い間紛争が続くミンダナオ島や日本各地から、平和のために地域で活動する人びとが講師として駆けつけてくれました。2日間の学びの後、学生たちは「世界で何が起きているか初めて知った。感じたことを家族や地域の人とシェアしたい」と話してくれました。



参加者全員が、平和への思いを共有



原爆展実施国・地域 (2015年4月現在)

開発の重要な基礎づくりに貢献

独立行政法人国際協力機構 中国国際センター所長 大田孝治

世界でも知られているトヨタ、ソニーと同じように、ヒロシマ、ナガサキという地名は海外の小学生にまで知られていて驚かされます。

途上国では経済発展だけでなく、平和と安定への努力が求められています。

JICAボランティアが、ヒロシマとナガサキという言葉の力を活かして平和について一緒に考える「原爆展」の取り組みは、開発の重要な基礎づくりに貢献しているはずで



有志によるイニシアティブを称える

広島平和文化センター理事長 小溝 泰哉

JICAボランティアの原爆展が有志のイニシアティブで始まったことに注目しています。しかも、ニカラグアという対米関係が複雑な地でこれを実現し立派なモデルを作ったことに感動です。この活動をJICAも支援。いまや世界60以上の国で130回近い実績。すばらしいです。ここに平和創造へのみずみずしい可能性を見ます。皆様の粘り強い勇気と創意を心から称えます。尊いお体を大切に!

